

「封城」(ロックダウン) 下の武漢の暮らし

一方方女史の『武漢日記』抄訳(1)

田畑光永(ジャーナリスト)

はじめに

新型コロナ肺炎はいまだに世界中で猖獗をきわめているが、発症の地となった中国の武漢市は1月23日から2ヶ月半にも及んだ封鎖—中国語では「封城」—が4月8日に解けて、1100万市民の生活はようやくもとに戻りつつあると伝えられる。この封城は外に向かっては、飛行機は発着せず、列車も停まらず、長距離バスも運行停止、隣省との境界には検問所が設けられ、高速道路のインターチェンジも閉鎖という徹底ぶりであった。

そればかりではなく、市民にもきびしい外出禁止が課せられ、自由に買い物にも出られない中で、人々は文字通り息をひそめるようにして、毎日をやり過ごしていた。その実情については、わずかに3月10日、習近平国家主席が同市を訪れ、住宅団地を視察に回った際に、主席へのお付きの説明を聞きとがめた住民たちが「そんなのは全部嘘だ!」と、口々にベランダから声を上げたというニュースが伝えられたことがあったが、それ以外、外部からはほとんど知ることはできなかった。

しかし、その封城の中の生活を冷静に日々記録していた作家がいた。方方という女性作家による『武漢日記』がその作品である。もっとも状況が状況であるから、出版されたわけではなく、インターネットで執筆と同時進行で広く読まれた。少ない日で5万人、多い日は15万人もの目に触れていた。すでに英訳、独訳の出版が決まっていると伝えられる。

作者について簡単に紹介しておく、本名は汪方、1955年南京生まれで武漢育ち、1978年武漢大学入学、卒業後は湖北テレビ局での仕事を経て現在は作家。湖北作家協会前主席、中国作家協会全国委員。

なお付け加えておかなければならないのは、この作品は現在、中国国内で大きな論議的となっていることである。ご想像がつくと思うが、この作品がありのままを書いていることが中国にとってマイナスだと考える人々が、権力に近いところにいるからである。

さすがに『人民日報』など「権威」あるメディアにはまだ見られないようであるが、その系列の『環球時報』などには、「中国の顔に泥を塗りたいのか」といった批判が見られる。それも外国語訳が出版されるようになってから激しくなったように感じられる。

私も何とかこの作品を読みたいものと思ったが、なかなか遭遇することができなかった。しかし、中国の検索サイト「百度」で2月6日の1日分を見つけ、また本ブログの執筆者の1人、阿部治平氏のご努力で3月8日から24日までを入手することができた。

私もまだ入手した分全部を読んではいないのだが、早いほうがいいので、読んだ分から抄訳の形で、とりあえずご紹介する。果たして「中国の顔に泥を塗る」ものなのか、「泥とはなんだ」ということを頭の片隅に置いて読んでいただきたいと思う。(200415)

方方著『武漢日記』から(1)

2月6日

今日の武漢はまた雨。空が暗い。暗い中の雨と風は一種のすごみを感じさせる。ドアを出たとたん冷風に打たれ、身震いする。

けれど今日はいいニュースがいろいろあった。最近で一番うれしい知らせだ。まずラジオで聞いたのだが、

病気の蔓延は間もなくおさまるだろうということ。専門家という人が話していたのだが、私は信じられると感じた。それからネット上で盛んに言われたのが、アメリカの研究所で新薬が開発され（中国の専門家が「人民の希望」と命名？）、金銀潭病院での試験では結果は大変によかったようだ。武漢人はみんな大喜びだ。外出禁止の規則がなければ、早速、街中が大騒ぎになったろう。長く閉じ込められ、長く待ち望んでいた希望がやってきた。素早く、ちょうどいい時に、みんながうちしおれ始めたこの時に。

しばらくして、誰かがあれは嘘だったと言い、果たせるかな何の結果も出なかったとしても、それはそれでいいではないか。今はいいニュースとして聞こう。二、三日すれば、われわれの期待が本物だったとなるかもしれないのだから。

みんなが注目していた仮設病院が今日から正式に使われはじめた。中に入ったひとたちからのビデオや言葉が届いた。お粗末とかうるさいとか、そんな類の言葉が多い。でも、一日でできた建物だから、その分不完全なところはこれから早急に改善されるだろう。人が大勢となれば、感じ方もまちまち、まして病人となれば、である。焦燥、不安、煩わしさ、混乱、すべてあるだろう。どうしたって家にいるようなわけにはいかないのだから。

午後、武漢大の馮天瑜先生からメールが来て、閻志さんが彼に言うには、彼ら2人が展覽センターと武漢ホールの2つの仮設病院の責任を受け持つことになったそうで、全力で万全を期すとのことだった。「テレビの数を多くし、図書コーナー、充電ボックス、ファストフード・コーナーを設ける。患者全員に1日にリンゴかバナナを1つずつ配って、暖かさを感じてもらおう」とのこと。よく考えている。

ほかの仮設病院もおそらく責任制をとるだろうから、閻志さんにできることは、ほかの責任者の大半もできるはずだ。

武漢はここへきて、それぞれが一番大変なところを過ぎた。ここでさらに焦ってはだめだ。毎日あちらこちらへと彷徨っていたあの病人たちも、静かに室内で横になり、隔離されて医師の治療を受けられる。なにはともあれ、本人たちにも、ほかのみんなにも、よかった。でなければ、今日のような天候の日は、彼らの中のどれほどの人が病状を悪化させたり、路上でたおれたりしたことか？だからわれわれは気持ちを抑え、我慢する。全体の状況が管理下におかれて、はじめて人は安穩を得ることができる。

朝、中南病院呼吸器科の医師のビデオを見た。彼自身がウイルスに感染し、九死に一生を得た。現在は元気になって、ユーモアたっぷりに経過を話していた。彼は直接、病人に接し、感染した。その後、彼の奥さんも彼が重症となった時に看病して、やはり感染したが、こちらは軽症ですんだ。そこで彼はびくびくする必要はない、という。今回、軽症で済まずに重症になるのは、多くはもともと病気を持っている老人であって、若い人はもし感染しても、体調がよければ、注射を打ち、薬と水を飲めば、たやすく乗り越えられる、とのこと。さらにウイルス性肺炎の特徴は左右2つ肺が周縁から同時に感染し、鼻水や涙が出る明確な症状はないなどと語ったが、病いを乗り越えて来た人だけに、話しぶりは信頼出来た。

だから我々自身はやはり家にいて、恐れないことだ。多少の熱や咳に慌てふためかず、冷静に対処しなければならぬ。

今日、政府から全員が体温を測れとの通達 came。そこで人々は体温の検査中に感染するのではないかと心配を始めた。けれど私の理解では感染の疑いのある人は検温に出かける必要があるが、その他は電話で自分の区域事務所に報告すればいいので、なにもびくびくすることはないのだ。病気との闘いでも、人間はふだん同様、多くのバカな人がバカなことをする。しかし、より多くのバカでない人もバカなことをする。

私自身のことでは、朝起きてスマホを見たら、お隣りさんからのメモがあった。娘さんが今日、野菜を買

いに出たので、ついでに私の分も買ってきてくれて団地の入り口に預けてあるので、起きたら受け取って、とある。それを受け取りに出て戻ると、同じ敷地内に住む姪から電話。ソーセージと「腐乳」(豆腐の漬物)をくれるという、団地の入り口で受け取ってもよかったが、結局、部屋まで一山、持ってきてくれた。一か月、閉じ込められても食べきれないほどだ。災難の中で、同じ船に乗り合わせたものどうしの助け合い、ありがたく、暖かい。

ブログを書き終えたところで、李文亮医師が亡くなったことを知る。彼は当局の「訓戒」処分を受けた8人の医師の1人で、自身もウイルス肺炎に感染した。今、武漢市の全員が彼のために泣いている。胸中、やるせなさでいっぱい。

注：李文亮医師とは、武漢市中心病院勤務の医師。昨年12月30日、医師仲間とのグループチャットで、市内に多発する原因不明の肺炎について議論し、新種のコロナウイルスか調べていると書き込んだ。すると翌日、市の衛生当局から「デマを流した」などの理由で自己批判文を書かされ、3日には警察の「訓戒書」に仲間7人とともに署名させられた。

李さんはその後、自身も感染して1月12日に入院したが、1月末、李さんのツイッターやメディアの取材でこの経過が社会に知られると、当局に対する批判の声が高まり、当局側も李さんを擁護する立場に変わり、死亡当日の7日には国家衛生委員会、武漢市衛生局がそれぞれ李さんをたたえる声明を発表した。(続)

「封城」(ロックダウン) 下の武漢の暮らし － 方方女史の『武漢日記』(2)

田畑光永 (ジャーナリスト)

3月8日

(訳者注：前回は2月6日に書かれた日記だったから、それから1か月が過ぎている。残念ながら、その間の日記は入手できていない。また、文中のカッコ内は訳者の注だが、必要と思われる部分については、末尾に説明を加えた。***は一部省略の表示)

また雨。それもかなりの降り。寒気が音を立てる。昼間でも夕暮れのような。遠い成都(四川省の省都)に住む劉先生が武漢の友人に託して魚を何匹か届けてくれた。ずいぶん固辞したが、結局、押し切られた。魚はきれいにさばいてあり、ネギ、しょうが、大根まで添えられていて、これでスープを作りなさい、簡単だから、との伝言。また、私の日記で私の糖尿病を知り、ドライフルーツと手紙が居住区の事務所に届いていた。申し訳ないと同時に胸が熱くなった。友人の皆さん、心配してくれてありがとう。

今日は「三八婦女節」(女性の日)。ネットでさかんに女性に花が贈られている。子供のころは毎年、この日には必ず集まっては声を張り上げて歌ったものだー「女性の日、男子は働き、女子は遊ぶ、男子は家で宿題・・・」。この歌は武漢の言葉で歌うに限る。すると節回しやリズムがさまざまに変化して独特の味わいがある。思えばずいぶんと昔のことだ。

武漢の女性の顔つきは概してきつい。しかし、家の大事となると多くの場合、男が主役だ。面白いのは、もめ事となると通常、女が出てくることだ。男がだめというわけではなく、女のほうに我が家の男を守るとい

う気概が備わっているのだ。まあ言ってみれば、男には社会的に仕事があり、時には体面が大事で顔をさらしたくないという事情があっても、女なら別にかまわない、ということもあろう。大多数の女性は社会における地位が男より低いから、何かあった時はまず女が出て行ったほうが具合がいい。

武漢の女は言葉のテンポが速く、声も高い。言葉の衝突ではまず負けない。もし相手も女性で、女2人が対決するとなったら、これは見ものだ。思い出すのは、あの文化大革命の時代、娘の祖父は華中師範大の教授だったが、紅衛兵が彼をつるし上げようと家にやってきた。この時、祖母は祖父を家において、自分が出て行って、紅衛兵とやりあった。紅衛兵たちも相手がおばあさんでは手の施しようがなく、帰って行った。

この話を私は以前、ある文章に書いたことがある。そのせいか、今度の疫病戦中でも、日常のやれ集団購入でのいさかいとか、やれ居住区事務所との交渉とかを、自分の領分と考えて、多くの女性が出てきた。武漢の女性は気が強く、声も大きい。ビデオを撮ろうとする連中をいくつも追い払い、大勢を震え上がらせた。ここで、武漢のすべての女性にエールを送る。楽しもう！三八節。

今日は「封城」46日目。疫病戦もこのところ、喜ばしいニュースが増えてきた。ある区域は試験的に封鎖が解除されて、仕事が始まるとひそかに伝えられている。1人の友人が言うには、空港が運行再開の準備をしている、とか。この知らせは驚喜の上にもう1つ驚喜だ。そうなれば封鎖解除も近い。武漢人、頭を外にもたげられるか？

医師の友人からの知らせもいいものだ。新しく確認された感染者が2日続けて少ない。明らかに減っている。感染が疑われる人はとっくに少なくなっている。仮設病院も順次、休院に入っている。最大の武漢ホールの病院も今日、休院を宣言した。感染疑いの新しい患者は直接、入院して治療が受けられることになった。一部の病院の日常的な外来診療も復活した。ウイルスの蔓延を抑える戦いは現在、戦場整理の段階に入っている。すっかり終わるまで指を折りながら待つことにしよう。

現在、重症の患者はなお5000人、入院患者は1万7000人あまり。全国のトップクラスの医療団体が協力して、すべての患者が最良の治療を受けられるように、今、治療方法の選別が進められている。医師の友人が楽観的なせいか、この2万人余りの人たちの退院も近いのでは、と私には感じられる。

実際、疫病戦も終戦が近づくとつれ、市民生活の秩序が戻ってきたことが明白に感じられる。多くの居住区のサービス部の仕事も丁寧になり、態度もすこぶるよくなった。

作家協会の仲間たちもぼつぼつと出てくるようになった。雑誌『長江文芸』の担当者は期日どおりに出版しようとしている。彼らは家に持ち帰って仕事をしていたのだ。もともと私は春節（旧正月）の後、中編小説を1篇、彼らに渡すと約束していたのだが、結局、ウソをついてしまった。

記者が取材にくると、おおむね同じことを聞く。つまり、「開城」（封鎖解除）した後、一番したいことは何か、というのだ。私はゆっくり休むこと、そして、この小説を完成させること、と答える。借りた借金は返さなければ、以後、誰も一緒に食事もしてくれなくなってしまう。

このあたりはすでに病気は落ち着いてきている。しかし不幸はまだ終わってはいない。泉州（福建省南部の都市）の欣佳ホテルに隔離されていた人たちがホテルの倒壊事件に遭遇してしまった。同窓生の剛剛が人混みの中から知らせてきてくれた。今晚六時過ぎの情報で、倒壊の内部に閉じ込められた71人中48人が午後4時まで消防の手で救出されたが、うち10人は死亡、38人は病院に送られて治療を受けている由。まだ23人が閉じ込められていることになる。気が気でない。その中の多くは湖北人だ。気の毒に彼らはウイルスからは逃れたが、危ない建物からは逃れられなかった。これは2次災害といえるのではないのだろうか。

とにかく、記録しておこう。

今日はまた『財新』（雑誌名）記者が香港の袁国勇院士（アカデミー会員・末尾に紹介）を取材した文章を読んだ。袁院士は武漢に来た第3回の専門家の1人で、今回の疫病戦でWHO(世界保健機構)が組織した合同視察団のメンバーであり、さらに香港特区政府の専門家顧問団の団員でもある。彼が記者に語った情報は真実、驚くべきものであった。

袁国勇氏：ひとつ本当の話をする。われわれが武漢で訪れた場所は多分、モデル地区であったろう。なにか質問をすると、直ちに答えが返ってくる。事前に準備ができていた。しかし、鍾南山（中国の著名な医師・末尾に紹介）さんは非常にきびしくて、何度も「ほかにはいないのか?」「結局、これ以上、病人いないのだな?」「ほんとにここにはこんなにたくさんいるのか?」などと追及した。

しかし、答えはこんな具合だ。「私たちは今、検査を進めているところです。なぜなら湖北省疾病対策センターが国から検査キットを受け取ったのは1月16日だったのですから」

彼らはわれわれに問い詰められて、最後にこう言った。「多分、神経外科の1人の患者から14人の医療人員が感染したようです」、「しかし、その医療人員たちも感染が確認されたわけではありません」

『財新』記者もきびしく質問を続けた。「彼らとは誰ですか?あなた方が武漢病院を視察した時、主だった人ではどんな人がいましたか?」

袁国勇氏の回答「武漢市衛生健康委員会、武漢市疾病センター、武漢市内の病院や湖北省の健康委員会などの人たちだった」

記者はさらに質問を続けた。「彼らはあなた方になにか隠しているようには感じませんでしたか」

袁国勇氏の回答「食事の時、鍾南山氏と同じテーブルに1人の副市長が座った。顔色はよかったが、気は重そうだった。あの時、彼らはすでに大変なことが起こったと知っていたのだろう。なぜなら3つも専門家の代表団がやってきたのだから。少し前には仮に何か隠していたとしても、あの段階ではもはや隠すこともなくなっていたのではないか。ただ彼らがしきりに強調したのは、検査キットは武漢に来たばかりだということだ。それがなければ診断を確定することはできないと」

なるほど、端緒はつかめた。調べるべきは調べてもらいたい。1つ1つ問いただせば、きつとなるほどという答えが出てくる。私、われわれ、みな知りたがっている。こんな重大事をなぜ隠そうとしたのか。

鍾南山院士の鋭くきびしい追及で、ようやくウイルスの人から人への伝染の情報が庶民にも伝わった。それによって武漢人は茫然と無知な状態から目覚めたのだ。あれがなければ、あと何日、騙され続けて、すさまじい、残酷な結果が出現することを知らずにいたことか。1000万人以上の武漢人のどのくらいが生き残れただろうか。

現在の問題は、1、袁国勇氏が言及したような人たちは必要なか不要なのか、調査、再調査を。2、はじめの2つの専門家視察団はとてつもなく大変なことに知っていたのか。なぜ鍾南山院士のようにきびしく追及しなかったのか。袁国勇院士は記者の質問に「われわれ科学者は永遠に『軟情報』（末尾に紹介）を軽視してはならない」と語っていた。

訳者注：

- 1、 ホテルが倒壊した泉州という地名について、一応、福建省南部の泉州市と解釈したが、「湖北人が多い」という点でいささか疑問が残る。しかし、中国の地図帳でこの地名を検索しても、ほかには見当たらなかった。
- 2、 袁国勇氏は中国工程院院士、香港大学微生物系教授。なお文中では分かりやすく「アカデミー会員」

と注を入れたが、中国語の「工程」は日本語では「工事」の意味で使われることが多いので、なぜ医師がと不審に思われるかもしれない。しかし、中国の工程院には理工系だけでなく、化学、エネルギー、環境、農業、医薬衛生など、広範囲の学者およそ 900 名が網羅されていて、実質は科学院と呼ぶのがふさわしい。

- 3、 鍾南山氏は 1936 年生まれで、広州医学院長、北京大学教授などを務めた呼吸器医学界の長老的存在。2003 年にはサーズ流行の際の業績で「中国十大人物」の 1 人に選ばれた。今回のコロナウイルス肺炎に対しても、国家衛生健康委員会に高級専門家として参加し、新型ウイルス防疫研究グループのトップを務めている。

この「日記」によっても、鍾氏は流行初期の現場の実情把握に先頭に立って、聞き取りなどにあたっていたこと、そしてその際、「現場」の官僚主義的対応に対して専門家がいらだっていた様子が見えてくる。

- 4、「軟情報」という言葉が最後に登場するが、中国語の検索サイトの英訳は soft intelligence である。一般的に通用している言葉とは言えないが、その意味は明確な科学的根拠はなくても (soft)、例えば地震の前にある動物が特異な行動を見せるといった兆候や自然現象を指す言葉として、ここでは使われている。(200419)

「封城」(ロックダウン) 下の武漢の暮らし

－ 方方女史の『武漢日記』(3)

田畑光永 (ジャーナリスト)

訳者注: ご覧のように今回は前回までよりすこし長い。途中、省略した部分がないためだが、そうしたには理由がある。お読みいただければお分かりのように、今回は日記の日付より 2 か月近く以前の 1 月中旬、蔓延がまだ初期の段階に、北京では武漢の「疫情」について全国的なテレビ・電話会議が開かれ、真剣に対策が話し合われたのに、現地、武漢では行政の立ち上がりが遅く、その間に犠牲者が増えてしまったことに、筆者は痛憤やるかたない思いをぶちまけている。状況を直接知らないわれわれにはよく意味の分からない部分もあるが、それはそれとして、市民としての痛憤を省略なしにお読みいただきたい、と思ったのである。末尾に当時のいきさつを訳者の知る限りで注釈をつけた。*****

3月9日

昨夜の雨はかなりの 降りだった。今朝も続いている。春雨の持ち味は音もなくそぼ降るところにあるはずだが、今はざあざあとやかましい。そして一日中、電灯を点けていなければならない。

医師の友人から知らせが来た。字面から楽観的な気分が見て取れる。新しく確認される患者が少ない日が 3 日続いている。それも減り続けている。疑われる患者の数も少なさを保っている。(湖北) 省と (武漢) 市の大将が代わってから、確かに力強いやり方で蔓延を抑えている。武漢で病人が多かったころ、19 の仮設病院を建てる計画されたが、今は明らかに不要になった。

医師の友人が言うには、すでに 11 の仮設病院が休院し、残る 3 つも今日明日中に休院するだろうとのこと。現在、武漢の疫病戦はすでに終息段階に入った。戦場整理といったところだ。重症の患者が持続的に減っているのには 2 つの要因がある。1 は治った、2 は亡くなった、である。現在の重症患者はなお 4700 余人、小さな数字ではない。医療人員は最良の方法で治療にあたっているから、彼らが頑張っすこしでも早く状況が良くなることを期待している。

多災多難な中心病院では、今日亡くなった人のなかに、また 1 人、医師がいる。眼科医の朱和平先生だ。この前、同じ眼科の李文亮医師が 2 月 6 日夜、亡くなった。甲状腺乳腺外科の江学慶医師は 3 月 1 日に亡くなった。眼科副主任の梅仲明医師は 3 月 3 日、亡くなった。これまでに中心病院は 4 人の医師を失った。内 3 人は同じ科だ。聞くところでは重症者のリストにはなお何人か、中心病院の医師が含まれているようだ。

こんな惨状を前にしては、問いかけざるをえない。中心病院では何が起きているのか？なぜこんなに多くの医療人員が倒れるのか？病院の主要幹部、つまり院長と共産党書記はどう解釈しているのか？新型コロナウイルスへの理解が足りないというだけなのか？あるいは前向きの言い方をすれば、中心病院の医療人員は武漢人民のために人体の防護壁を築いているのか？これらの質問の意味を分かってもらえるだろうか？

考えてみれば、これらはわれわれが必ず聞かねばならないことなのだ。今日、すでに数篇、中心病院の行政幹部に対する質問を読んだ。また事情を知る人の自己批判とアピールも読んだ。そこに書かれた内幕には真実も虚偽もあるだろうが、私にはそれを確認することはできない。しかし、4 人の医師が死に、病院にはなお 200 人以上の医療人員が横たわっていることは間違いのない事実なのだ。

そのことだけを基に考えても、中心病院の院長と書記はこの病院の指導者としてふさわしいのか。そして彼らがいなくても、中心病院はそのほかの人たちで疫病戦を続けられると私は信ずる。だから私はここで、湖北省と武漢市のお役人の引責辞職はまず中心病院の書記と院長からスタートすべしと言いたい。

引責辞職は本来ひとつの常識にすぎない。自らの本分とする仕事ができず、仲間に重大な損害を与えたなら、良識があれば直ちに引責辞職して、贖罪の自覚の上でそれを償うべきである。ところが実際には中国でこのような人、あるいは出来事に出会うことは難しい。

われわれ大勢、ほんとに大勢の人間は、たくさんの大きな概念をわきまえている。しかし、基本的常識が分からない。概念とはむなしいもので、つかまえようにもつかみどころがない。それはわれわれが拝聴するお役人の話のようであり、拝読するお達しの書類、読む新聞の文章のようで、長いことこねくりかえしても何が核心の内容なのか分からない。

そして主題を探し当てたとしても、その主題の大半は実のないうつろなもの、無数のありふれた小常識であって、そのどれもがあつた概念どもによって言葉の土壌の下に抑えつけられていて、芽を吹くことは非常に難しい。しかし、これが常識、人生の必需品なのである。

昨日、私は袁国勇先生が「軟情報」（前回既出）という 3 文字に触れたと書いた。科学者は軟情報を重視しなければいけないと言ったのだ。実際は科学者のみならず、その他のたとえば病院の管理者、政府の管理者も同様に「軟情報」に特に敏感でなければならない。

私自身は（2 月）18 日から家を出るときにはマスクをするようになった。家のお手伝いさんにも買い物に行くときにはマスクをするように言った。なぜ？巷のいろいろな「軟情報」を聞いて、用心にしくはないと思ったからだ。

惜しむらくは、われらが政府のお役人は何千万もの人民を管轄しながら、まったくこういう用心深さがなない。各種の大がかりな行事が 1 月 21 日まで続いた。鍾南山（前回既出）先生が 20 日に「人から人への伝染」の一句をすでに発していたにもかかわらず、それらの行事は中止されなかった。

私の同業の YL が言うには、彼女の撮影グループの友人のうちの 4 人が、1 月 19 日に「田漢（有名作家）大劇場」へ上演作品を撮影しに行った。そしてそのうちの 3 人が新型コロナウイルス肺炎で命を落としてしまった。もしもっと早く市民に伝えていたら、もっと早く上演を中止していたら、もっともっと多くの死を減らすことができたのではなかったのか。

われわれ民間人は警戒心を高めるのに、われわれの指導者たちはなぜこんなに無知なのか？言うなれば、常識がたりないのだ。彼らの常識は政治の概念の上に立っており、われわれの常識は生活経験の上に立っているのだ。

今日は1篇の文章がネット上を乱舞した。タイトルは「第4回武漢面倒丸投げ会議開く」。この文章は国家衛生健康委員会が1月14日に防疫部署テレビ・電話会議を開いたことを取り上げている。私は友人に役所のインターネットを調べてくれるように頼んだ。はたせるかな1本のニュースがあった。タイトルは「新型コロナウイルス感染に対する防疫工作の配置について、国家衛生健康委が全国テレビ電話会議を招集」。私はその中の2節を書き写した。

「会議はつぎのように指摘した。現在の防疫作業には大きな不確定性が存在する。感染はなお武漢市の限定された範囲に止まっているとはいえ、新型コロナウイルスの伝染源はまだ探し当てられず、感染ルートもまだ掌握しきれていない。人から人への感染能力はまだ嚴重に監視しなければならない。タイ国衛生部が武漢から輸入した実験室での確認症例を通報してきたが、ウイルス防護情勢に重要な変化が現れている。伝染が拡散する可能性が大幅に上昇し、とくに春節の交通繁忙期には症例数とその発生地が増加する可能性があり、国内の病例が再度、国外に輸出される可能性も排除できない。最低線を維持する決意で危険への意識を強化し、蓋然性の高い考え方で蓋然性の低いことがらに应对し、管轄区域の防疫方策を研究、制定して、出現する可能性のある新症例に可能なかぎり速やかに、かつ有効に対処しなければならない」

「会議は、武漢が決定する防疫工作を、今後の全国の防疫工作の先駆けとすることを要求する。湖北省と武漢市は厳格な管理措置を採用し、農産品市場の管理を重点的に強める必要がある。発熱した人間の管理を強め、体温検査と発熱問診の2本の防衛線を固める。人々の活動の管理を強め、大衆密集型の大規模活動を減らす。発熱患者が武漢から出ないように注意を喚起する。患者の救護と密接接触者の管理を強める。最も厳格な措置を間違いなく実行し、病疫を現在地にとどめる決意を固め、武漢の病疫を拡散、蔓延させないよう最大限の努力を払わなければならない」

1月14日の会議！1月14日！鍾南山（前回既出）が「人から人への感染」を言うより6日も早い。「封城」より9日早い。「第4回面倒丸投げ大会」の一文を書いたのは理工系の男性で、やり方は最高だ。かれは素早く発表時期を計算して、書き加えた。「この文章は2月にネットに公開する。発表時間は2月21日より前のある日。最後に修正する時間は2月21日午前8時39分。その後、文書の発表時間は1月14日に調整された」—これは面白い。

現在、この文書は間違いなく存在する。つまり、この会議は確かに開かれたのだ。私は私の同級生たちの討論に基づいて以下の文章に構成した。

K同学の言：「まずこれほど大きな全国テレビ・電話会議は参加者も多く、基本的な内容を事後に改ざんすることは不可能だ。そして異議がなければ、湖北省、武漢市の2つの段階の衛生健康委あるいはその背後にいる政策決定者は、何も心配することなくことに立ち向かったはずだ。次に国家衛生健康委のホームページが今回特別に更新されたが誰が行ったのか？誰の指示によるのか？本当の過程はどうだったのか？失職した臨時工への個人的補償なのか？それとも役所が手配した事後の補償なのか？実際には国家衛生健康委はいかなる方法によっても、この非公開で報道されなかった会議の状況を明らかにして、世人の見方を正すことができた。ところが、こういうこそそしたやり方に頼るのは納得できない。だれも責任を追及できないように、衛生健康委はネット上に一篇の会議情報を流して、それによって今日の武漢の悲惨な局面を招いてしまったのだ。会議の精神は公開すべきではなかったのか？内部の会議と誰がきめて、対外的には秘密にし

てしまったのか？

そう、疑問が多すぎる。全国的会議であるなら、湖北の役人たちも必ず参加したはずだ。誰がこのテレビ・電話会議に参加したのか？会議の後、なぜ全く執行しなかったのか？そしてなぜメディアを通じて大衆に公開しなかったのか？発熱した人間を調べ、大型行事を中止して、発熱した人間が武漢から離れることを禁じ、人が大勢集まることを抑えるといったことをなぜしなかったのか。

1月14日に情報を公開し、各界の人士に注意を促せば、武漢はこれほど多くの死者を出しただろうか？これほど惨烈な災難に遭っただろうか？国全体にこれほど大きな損害をもたらしただろうか？病気の蔓延と結果の重大さをすでに知った以上、なぜ手段を尽くさなかったのか？これは人為的な洗職か？それとも注意散漫か？はたまた無知か？何日かをやりすごせば、自分は安泰と考えたのか？要するに、私には合点がいかない。

反省と責任追及は2つで1体だ。きびしい追及なくして、まじめな反省はありえない。病気がここまで広がった以上、それはどうしてもしなければならない。現在、まだ人々に記憶が残っている。時間の細かいところまで、頭の奥底に深く残っている。まさに今が反省と責任追及をなすべき時だ。そしてお役所には速やかに調査班を立ち上げるようもう1度希望する。病気が今日の災難にまで広がった究極の原因はなんなのか、徹底的に調べるのだ。

同時に提案する。文章を書く能力のある武漢人は1月以来、自分が見たこと、聞いたこと、感じたことを記録してほしい。また民間の書き手はグループをつくって身内を失った人々を探し、彼らが医師を探すところから家族の死に至るまでの過程を書き記すのを手助けしてほしい。

勿論、ホームページを開設して、こうした文書を分類して掲載すればより便利である。勿論、可能ならの話になるが、何冊か記録集を出すことも必要だ。われわれ武漢人は今度の災害について集団の記憶を残すのだ。みんなができる限りの援助の手を差し伸べてくれることを、わたし個人としても願っている。

今日来た医師や友人の発言中には、こういうことも書かれていた。「閉じ込められている900万の武漢人および100万の他郷の人々、他所にいて今に至るも帰ってこられない人たち、統計数字には表れないが差別されている無数の武漢人、湖北と武漢に駆けつけてくれた4万2000人の英雄戦士、14億人のまだ正常な生活に戻れない中国人民、すでに皆、疲労困憊、持ちこたえられない」

もう1人の医師の友人はたった今、こう書いてきた。「ホットラインによる『今、関心のある問題』を見ると、民衆が関心を持つ主要問題は『病気への感染』から、『いつ仕事に復帰できるか』、そして『復帰のあとの防疫』へと移ってきている。大部分の民衆は今のところ仕事復帰の手立てがないか、あるいは失業中である。巨大な経済的圧力が巨大な焦燥感を生んでいる。それは消極的感情から心理的危機へとつながるだろう」すべての災難がすみやかに終わることを念じてやまない。(続)

訳者注続き：私が本ブログにこのコロナウイルス肺炎について最初に書いた時には、まだ事情がよくわからず、現地当局の情報隠蔽、初動の遅れには触れなかったが、その後、当時の経緯が徐々に明らかになってきた。

まず、最初の患者の発生については、1月11日に武漢市当局は19年12月8日と発表した。今のところこれが公式発表である。しかし、今年3月13日に香港紙『サウスチャイナ・モーニングポスト』は「中国政府の非公開情報」として「19年11月17日に感染した湖北省の住人(55歳)にまでさかのぼれる」と伝えた。同紙は同時に「0番目の患者はまだ確定していない」とも書いている。

つぎに「日記」が問題にしている 1 月 14 日の会議については、AP 通信が中国政府の内部文書を入手したとして、「14 日、中国国家衛生健康委員会の馬曉偉主任が内部会議で新型コロナウイルスについて、『2003 年の重症急性呼吸器症候群（SARS）以来のもっとも深刻な問題で、公衆衛生上の重大な事件になる』との認識を示した」と報道している（1 月 17 日『読売』ワシントン特派員電）。

その後の患者数であるが、19 年 12 月 31 日の市当局の発表では「27 人の症例確認、1 人重体」、1 月 18 日、市衛生当局「16 日現在、患者数 45 人」。それが 22 日には「571 人、死者 17 人」、さらに 24 日発表では「患者数 830 人」となる。日記の筆者が怒っているのは 23 日の「封城」に至るまでのこの期間の当局の無策である。しかも、その間、19 日には伝統とはいえ「万家宴」という「4 万余りの世帯が料理を持ち寄って春節の到来を祝う」大宴会も例年通りおこなわれた。

「封城」（ロックダウン）下の武漢の暮らし － 方方女史の『武漢日記』（4）

田畑光永（ジャーナリスト）

3 月 10 日

天気はすこぶるよくなった。お日様がまぶしい。どこの庭も写真に絶好だ。満開の花、百花繚乱。そうだ思い出した。今年は 2 月 6 日に海南島に行き、ちょうど今日、帰ってくる予定だった。結果は市内に封じ込められて、出かけるあたわず。感染症のほうはここまで来て、やっと掛け値なしに、苦難の日々は過ぎた、と言えそうになってきた。

仮設病院はすべて休院した。新しく確認される感染者も非常に少なくなった。もう 2, 3 日で 0 になるのではないか。災難はもうすぐ終わる。友人の皆さん、でも決して私に向かって「勝利」とは言うなかれ。心してください、「勝利」ではありません、「終わり」です。

「封城」がこれほど長びくとは正直思わなかった。前回、病院に薬をもらいに行った時、1 か月分で十分と思ったが、実際はとてもそれでは足りず、また病院へ行った。それに私の手の問題がぶり返した。数年前、手のひら全体にひび割れができた。そして 1 年近い治療で完治したはずだったのが、このところ突然また指先から割れてきた。今日は指が痛くて、キーボードが打ちにくいので、多くは書けない。

しばらく前のことだが、『騷客文芸』という雑誌（私は寡聞にしてこの雑誌を知らなかった、お許しあれ）から郵便物が届いた。それにはいくつかの質問が書かれていた。ニュース媒体と違って文芸誌だから質問も穏やかだったし、同業なので、思うままに回答した。今日はそれを書き留めておきたい。

1、貴方の日記はありのまますぎるのでは？内面の細かい記録やさまざまな感情を述べる時に、文学的手段で修飾しようとは思いませんでしたか？

方方：文学観が違うからそう考えるのでは？これは日記だから修飾はいりません。書き始めはツイッターでした。ツイッターはむだ話の舞台ですから、思いつくままに書いた。それに私は文学青年ではなく、職業作家ですから、私の手は私の心を書く。内心で思うことを書けばそれで充分と思っています。

2、大勢の人があなたの日記に注目していて、『長江日報』（訳注・中国共産党武漢市委員会機関紙）のようなメディアは信じていない。これをどう思いますか？

方方：、ニュース・メディアを信じない、というのは、偏っています。大きな面の報道、病気の全体的な状況はやはりメディアの報道を見なければなりません。私のはただ個人の感じ方です。私はここにおいて、局面

全体を見渡すことはできません。明らかなことです。書き始めた時は勿論、こんなに多くの人を読んでもらうとは思っていませんでした。私にも不思議です。学校仲間や仕事仲間にも、なぜ大勢が読むのだろうかと聞いてみましたが、だれにもはっきりとは分からなかった。

3、「時代の一粒の灰も個人の頭に落ちれば、それは一つの山だ」。これは今回の感染症騒ぎの中で、最も広く伝わった一句です。この言葉を思い返してみても、一つの予言となった、という感じはしませんか？

方方：・これは予言ではありません。一つの事実にすぎません。いつの時代にも存在する一つの事実です。

4、貴方は毎日、個々のニュースに注目していますが、「武漢日記」のほかになにか一人の人、一つの事柄の運命を記録して、小説にする考えはありますか？（つまり最も深く貴方を動かした個人、事柄の運命というものはありますか？）

方方：多くの人を私を突き動かし、私を感動させました。でも小説を書こうという気持ちはありません。というのは、今、私の手の上には書く計画がすでにたくさんありますから。

5、ある人に言わせれば、今度の感染症騒ぎに中国の作家は集団で声を失った、そうです。なぜ貴方は声を上げるのですか？

特に貴方の日記にはかなり大勢の何もしない役人や武漢市に対する批判が・・・

方方：その見方は間違っています。本当のところ、多くの作家は記録しています。でも、各人の記録の仕方は違います。ある人は小説の形で記録し、あるいは個人的に記録しています。私のように公共のプラットフォームに記録する人間も少なくありません。それから他地方の作家はこの状況が分かりませんから、声の上げようがないのは明らかです。アフリカでエボラ出血熱が蔓延した時は私も声を上げませんでした。どうしたことだか分からなかったからです。自然なことです。作家に1人づつ何かを言わせようというのはやりすぎというものでしょう。武漢の蔓延がこんなにまで広がったのは、勿論、1人の人間のせいではありません。湖北省と武漢市の主な役人と専門家、それに湖北と武漢の衛生健康委員などなど、全員に責任があります。それも大きな責任が。彼らに責任があるとすれば、私にもその責任を追究することはできるはずですが。

6、「媚を売りたいなら、節度を守るべし。私は年はとったけれど、批評する気力は一向に衰えない」。この言葉はあなたにまつわる多くのエピソードを私に思い出させました。たとえば「某作家は魯迅文学賞を取るために運動した」、「某詩人は肩書によって評価を上げた」など、貴方が発表された質問書はどれも批評でした。それも皆、周辺の人たちでした。頭を下げていては見えない、頭を上げてこそ見える、と言いますが、貴方が発するのはいつも批評でした。貴方にとって、批評とは何を意味するのでしょうか。

方方：作家協会の役職についていたころは、規約に違反することがあれば、まず協会の党組織と相談し、彼らに処理してもらいました。しかし、彼らを取り上げない場合、やむなく私はネット上で声を上げましたが、職責を果たしただけです。今は引退しましたから、彼らが何をしようと、関係ありません。

7、作家とは著作以外にも、より多くの社会的責任を負うべきだとお考えですか？

方方：人によるでしょう。すべての人が社会的責任を負うのに適した性格だとは限りません。「負う」という2文字は簡単ですが、腹が坐ってなく、能力もなく、性格も弱く、気も弱く、すぐ焦る、と言った人には「負う」のを任せる必要はないでしょう。この世界のことは、誰かが何かを引き受けるとすれば、その人はその負担を楽しむのです。昔からそうです。誰かに無理強いしてもだめです。ですから、選択の問題です。すべきか、すべきでないか、ではありません。

8、最初、貴方は『軟埋』（訳注・方方が『人民文学』2016年第2期に発表した長編小説）について、「廟堂」（官僚勢力）と「江湖」（一般社会）の双方から攻撃されました。どう思いました？大勢がわーっと攻め

寄せてくるのは怖くありませんでしたか？

方方：なんでもありませんでしたよ。怖いことなんか一つもない。向こうのほうが私を怖かったのでは？筆の戦いですからね。私は職業作家ですよ。することは字を書くことですよ。なんであの人たちが恐ろしいの。こん棒で喧嘩をするなら、きっと怖かったでしょう。しかし、彼らは文章を書いた。私の得意技ではありませんか。貴方の言う「江湖」とは極左人士のことでしょ？あの人たちのレベルは低すぎる。文字能力、論理的判断、思考慣性など、まったく低レベル。あの連中と文章で争うのは自分を値引きしているようだった。中国のこの素晴らしい文字を彼らに使うことは惜しいかぎり、彼らとのやりあいは今、思ってももったいない。しかし、役人は違う。とくに大官は権力を持っているから、引退後でも大勢に影響力がある。彼らが出てきて私を攻撃すれば、当然、私は反撃する。あの極左のごろつきたちとはいやいややり合ったのだが、お役人の衣をまとった極左となれば、私には反撃しない理由はない。反撃の結果、負けたのは私ではなく、彼らのほうだった。彼らは今でも覚えているから、いい加減に作家を罵ったりしない。退職高官たちが今後、跳び出してきて1人の作家の作品を批判したりするかどうか、見ていてご覧なさい。それは彼らが自分自身をやっつけることになるから。

9、ずっと将来のことをいえば、もし誰かが方方という作家を評価して、「彼女は社会的責任観が強く、良識に富み、尊敬された作家だった」と言われるか、「彼女は文章のレベルが高く、著作の技巧に優れた作家だった」と言われるか、どちらを希望しますか。

方方：まあどちらでも。もともと私は他人の評価は気にしません。自分流に生きられればそれで結構。他人がどう感じ、どう評価しようと、私には関係ありません。

10、『武昌城』（訳注・方方の長編歴史小説。『人民文学』2011年第3期に発表）を書かれた時、真実の歴史と想像上の虚構とのバランスをどうとりましたか？歴史を肝に銘じることは、今現在の生活とどうかかわりますか？

方方：小説はあくまで小説です。虚構が必要です。しかし、真実の歴史を小説に書く時は歴史を尊重しなければなりません。私は私の筆から生まれる人物を歴史のある過程に放り込むだけです。あらゆる歴史には隙間があります。歴史小説を書く時は頭の中に歴史上の事件の大きな図面を広げます。そして、その中の隙間を探し出して、私の人物をその中にはめ込むのです。歴史を銘記するとは、歴史を鑑とするという一言に尽きます。

11、ネット上には貴方に疑問を感じたり、あるいは反対したりする声もたくさんあります。そういう声に接した時、不満を感じたり、傷ついたりしますか？貴方がそういう状況に置かれ、周りの人たちが心配したり、慌てたりしている時、あなた自身はどのように平常心を保ちますか？

方方：傷ついたりはしませんが、不満は多少感じます。しかし、もっと大量に感じるのは怒りと不可解です。極左の連中は怒りを感じるからといって、なぜこんなことをするのか。あるいは理解出来ないからといって、なぜそれほど恨むのか？私は彼らの中の誰1人もまったく知りませんし、なんのつながりもありません。それなのに彼らの私に対する怒りは、彼ら全部と前世以来、父の仇だったみたいです。全く理解できません。私とて常に平常心でいるわけではありません。緊張する時もあります。どうしたらいいかわからない時もあります。多くのことがはっきりしない時、心は乱れます。

12、作家協会の前主席という肩書は、身を守るのに役立ちますか、それとも逆ですか？

方方：どちらもありません。主席だった時もなんとも思わなかったし、やめてもどうということはありません。肩書が私を守ってくれたこともなかったし、その逆を感じたこともありません。主席になる前、好き

に生きていましたし、主席になってもなにも変わらなかった。やめても以前と同じです。主席という地位をそれなりのものと思う人は中国の体制を根本的に知らないし、私個人についてもまったく知らないのです。13、貴方の多くの作品は武漢人の生活を描いています。武漢人のどんなところが一番好きですか？今回の肺炎騒ぎで、なにか武漢人の違う側面に気が付きましたか？

方方：武漢人は昔からさっぱりしていて、義理にあつい。人助けが好きで、江湖の気があります。それは武漢の地理的位置と気象条件に関係があるでしょう。武漢は昔から商業都市で、市民はうわついてちょこまかしていますが、肝っ玉は小さい。政府の話は割とよく聞きます。生活を楽しんで、政治にはそれほど興味がありません。きわめて現実的です。感染症に対しても同じです。これが私の武漢人の印象です。別に特別変わったところはありません。

14、作家と都市の関係をどう見ますか？

方方：魚と水の関係、植物と土壌の関係、でしょうか。

15、病気の騒ぎが終わったら、何を一番にしたいですか？

方方：書き終えていない小説を書き続けます。(続)

訳者補足—今回は「騒客文芸」という雑誌の書面インタビューに答えた内容がほとんどを占めるので、コロナウイルスについての記述はない。しかし、これまでは日本では一般になじみのなかった方方という作家について知るにはちょうどいい題材と思われたので、今回も全訳した。また、武漢では方方女史の知り合いでもある梁艷萍という湖北大学文學院教授(女性)が昨年の香港のデモを支持する文章をブログに書いたということで、批判を受けているといわれる。この文章にも方方女史が過去に自身が批判にさらされた時の回想があるが、ウイルス騒ぎが一段落するやすぐさま文字獄が始まるのも中国の現実だとしか言いようがない。(200428)

「封城」(ロックダウン) 下の武漢の暮らし

— 方方女史の『武漢日記』(5)

田畑光永(ジャーナリスト)

3月10日

天気は依然申し分なし。気持ちのいい早春の陽光。この季節に、がらんと人気のない東湖を想像する。梅はこの2、3日來の風雨で花が落ちてしまったろう。千本、万本の樹木はただ自らの楽しみのためだけに花を咲かせてこの季節を過ごしている。詩ならなんと詠おうか？花はみずから舞い落ち、水はみずから流れる。我が家の老犬は日がな閉じこもって、外へ出たがらず、どう追い立てても、庭にも出ようとせずに腹ばいのまま。私も同じ思い、出たくない。家でじっとしている。何人かの友と約束した。この病気がいなくなったなら、きっとここで一休みして、春の光を眺めよう、と。でもこれまでと違って、自然はさっさと去っていった。今は外へ出たいという感覚もなくなった。何かの後遺症かもしれない。

医師の友人は引き続き感染の状況は好転したというニュースを言ってくる。新規の感染確認は20人以下に減った。0になる日も近い。死亡者数も医師たちの努力によって、大きく減った。どうか死亡0というニュースが早く届くように。

今日、湖北省疫情防控指揮部が通達を出した。全省は県ごとに地区を分け、時を分けて、秩序よく企業の業務を再開し、生産を再開するように、と。ということは、われわれはもうすぐ正常な生活に戻れるということか？

1人の友人（友達にはみんな姓も名もあるけれど、それを言わないのは「噴霧器」＝色いろ言い立てる人間＝連中が霧を吹いて良民に害を及ぼすのを防ぐためだ）が朝、1枚の写真を送ってきた。それは武漢中心病院甲乳外科の数十人のウイチャットの写真集で、亡くなった江学慶医師がいたグループである。江医師が亡くなったあの日、写真では全員が自分の顔を黒い蠟燭に置き換え、江医師1人だけ本人の顔が写っている。私は大変感動した。同僚の皆さんがここまで情けがあり、義があることを泉下の江医師が知ったなら、ずいぶんと慰めになることだろう。

昨日から今日にかけて中心病院の艾芬医師の名前もネット上にずいぶん流れた。ネット封鎖は人々の怒りを巻き起こしている。人々はリレーのバトンのように1つ消されれば、1つ増やす。バトンを手渡すようにいろいろな文字、各種の方式で、ネット管理当局が消しきれないようにしている。消されれば発信し、それをまた消すという過程の中で文章を残すことは、人々の心中で一種の神聖な職務と化した。この神聖という感覚は一種の潜在意識における覚悟、これを守ることが、すなわち自分を守ること、という覚悟から生まれたものだ。事ここに至っても、ネット管理者よ、まだ消そうとするか？

ネット管理部門のこういうやり方は私には理解できない。彼らが私の文章を消す。一回、また一回。推測するに、極左の見張り役が告げ口をすると、彼らは「安定維持のため」せつせと消して、任務完了だ。こういう心理は私にもある。つまらない人間が騒いでいても、見なかったことにして終わりにしてしまう。しかし、『人物』という雑誌が艾芬医師について書いた文章を、彼らが消したのはなぜなのか？何か事の真相を暴かれたからか？なら、その真相とはなんなのか？文章が言う武漢中心病院のことは、まさにわれわれも聞きたいことだ。いったい誰が、どこで、なにが原因で、病気のことを20日間もほっておいたのか？ネット管理の人間は知りたくないのか？疫病の初発から蔓延までの間の事情を明らかにしなければ、武漢ばかりか全国の人々はこの苦しい道を乗り越えることはできない。

ネット管理の人たちはなにがなんだかわからずに文章を削除しているわけではないと思う。必ずどこからか「消せ」という指示が来たはずだ。だから、誰が削除を要求したのか？武漢の役所？あるいは湖北省の役所？あるいは・・・私には分からない。想像もできない。

去年の12月に病気が出現した後、これまでの過程で多くの道理に悖ること、多くの規則違反、多くの答えようもないことが起きた。これらについては最近になって、いろんな記者たちの調査から、1つずつ見えてきた。細かいことは多すぎて何とも言いようがないほどだ。役人にしろ、専門家にしろ、誤魔化し、汚職、うっかりミス、責任逃れとさまざまだが、事ここに至れば皆同じく犯罪だ。厳罰に処して戒めとしなければならない。だから私は役所が責任者を簡単に放免したり、微罪で済ますとは思わない。責任を追及しなければ、その結果、もっとも損害を受けるのはつまるところ国家自身だからだ。失なわれるのは政府の信用であり、民心が傷つくのは言うまでもない。

今後も様々な災難が続くだろう。何かをしなかった、あるいはやり方が悪かったなどは、まったく関係ない。誰もが自分には責任がない、となれば、国がそれをかぶることになる。だれもが知っている一句を引こうーこれより永く国は国たらず。

今日、わざわざ出かけて、関係条令を調べた。その中の1つは「党政指導幹部の辞職暫定条令」。何年に制定され、その後、修正されたかどうかも知らないのだが、まずここに少し引用してみる。

規定の第4章は「引責辞職」。その第14条はこうである。「党政指導幹部に職務上重大な失策、失当行為があり、重大な結果あるいは悪影響を生んだ場合、あるいは重大事故に重要な責任があるものは、再度、現職を担当することは不適當であるので、本人は引責辞職して現任の指導職務から去るべきである。

第 15 条はさらに具体的である。1、業務の失当によって重大な大衆的事件を引き起こし、あるいは大衆的、突発的事件の処置が不適當で、重大な影響あるいは悪影響をもたらしたことに主要な指導責任を負うものは引責辞職すべきである。2、政策決定に重要な失策があり、大きな経済損失あるいは悪影響をもたらし、主要な指導責任を負うものは引責辞職すべきである。3、災害に抵抗する、災害から救う、感染症を予防する面で重大な損失と悪影響を残し、主要な指導責任を負うものは引責辞職すべきである。4、安全面で重大な失策があり、連続して、あるいは多数回にわたって、重大な責任事故を起こし、主要な指導責任を負うものは引責辞職すべきである。5、市場監督、環境保護、社会管理などの面での管理、監督に重大な失策があり、連続あるいは多数回にわたって重大な事故、重大案件を起こし、大きな損失あるいは悪影響を発生させた主要な責任を負うものは引責辞職すべきである。6、「党政指導幹部選抜任用工作条令」の執行に力をつくさず、人の使い方に重大な失策、誤りがあつて、悪影響を生み、主要な指導責任を負うものは引責辞職すべきである。7、管理監督に手落ちがあり、同僚あるいは部下に連続して、あるいはしばしば、重大な規律違反、法律違反が発生して悪影響を生み、その主要な指導責任を負うものは引責辞職すべきである。8、配偶者、子女、身辺工作人員に重大な規律違反、法律違反があつて、その主要な指導責任を負うものは引責辞職すべきである。9、その他引責辞職すべき事情のあるもの。 上記の規定をここに記録する。

非常に明らかなように、引責辞職は正常な社会の運営に必須なものである。上の 9 条に照らしてみても、湖北省と武漢市において、誰が引責辞職すべきなのか？関係者それぞれが自分と照合することを提案する。各条項は自分と関係ないか否か。もし役人にその自覚がなければ、みんなで催促状を出そう。そこまで行っても、たいして意味はないかもしれない。しかし、以後、お役人は上の席に着いた時に、まず引責について知り、つぎに辞職を勉強するだろう。それでも恐れることを知らず、面の皮を突っ張って悪事を働くなら、人民はそんな奴に遠慮することはないのだ。

ここまで書いた時に、友人が「南方週末」記者の調査報道を送ってくれた。タイトルは「四人殉死、四人瀕死—武漢中心病院の『もっとも暗黒な時刻』」。冒頭にこうある—中心病院では今現在、四人の医師が瀕死の状態にある。第一線の楊帆医師が言うには、この四人は呼吸器不全ほか多器官不全。加えて各種のよくない症状を併発している。「ある人は完全に外部の医療手段に支えられて生命を維持している」。その人たちは副院長の王萍、倫理委員会の劉励、胸部外科副主任医師の易凡、泌尿器外科副主任の胡衛峰の各氏。嗚呼、悲哀を深く感じる。この状況において、中心病院の書記と院長は心安らかに彼らの地位に座っていられるのか？本気で叫びたい、どうか先頭を切って引責辞職してほしい？！（続）

訳者注：今回は筆者が武漢の病院の首脳に大きな怒りを感じ、引責辞職を求める気持ちがテーマである。筆者は「党政指導幹部の辞職暫定条令」を長く引用している。この文章は私も初めて目にしたのだが、引用の目的はおそらくこの条例が現実にはさっぱり守られていないことを読者に確認させるためであろう。

同時に現在の中国のきびしい言論状況では、行政に対するささいなクレームまでが「国家政權転覆陰謀罪」といったおどろおどろしい罪名に問われる危険があるので、みずからの主張の正当性、すくなくとも合法性の証しとする意図もあつたのではないかと推測する。こういう書き方を見ると、日記といえども筆者は強い緊張感をもって細心の注意を払いながら書いていることがうかがわれる。

「封城」(ロックダウン) 下の武漢の暮らし

— 方方女史の『武漢日記』(6)

3月12日

太陽は沈んだが、空は明るい。春の感覚はまだ濃厚に残っている。まず数人の友達が一冊の冊子を送ってきた一件を書く。タイトルは「ネットにおける方々へのこのような攻撃を貴方はどう見る？」

そこには 200 篇以上の私を攻撃する悪意の文章が集めてある。私には何とも言いようがない。こういう人たちは悪意満々、一筋の善意もない。少なくとも毀誉褒貶は半々にすべきではないのかしら。この冊子を出したのは「今日の湖北網」。発行元は湖北省新聞工作者協会。ということは、これはお役所のネット？私が責任追及の声を何回か上げたから、あるいは「引責辞職」を求めたから、そのお返しがこれ？

もう一件はもっと奇怪だ。突然、鳴り物入りで私が攻撃の的になったのだ。その中味は、私が特権を利用して交通警官に私の姪を武漢から送り出させ、シンガポールに行かせたというのである。いくつかの公共出版物がもっともらしい文章を載せている。しかし、見たところ、私を攻撃する人たちは全く何の材料も見つけられなかったようだ。

私の姪がシンガポールへ行ったのはじつはもう 10 数年も前のことだ。もともとシンガポールの華僑で、乗って行った飛行機は中国とシンガポール両国の話し合いでシンガポール側が華僑の迎えに出した便だった。やっぱり春節の時で、私の印象では午前 1 時離陸の予定だった（記憶が不確かなのだが、午前 3 時だったかもしれない。いずれにしろ深夜だった）。

兄嫁は 70 歳を越えていて、運転はできない。そしてその日にちょうど自家用車の走行禁止令が出た。私は規則は守るので、問い合わせに行った。率直に言って、私は武漢に 60 年以上も暮らしているので、警察には確かに知り合いも多い。団体の同僚の家族にも警察の人間はいる。警察署の文章教室に呼ばれて行ったこともある。昔、武漢市の警察で何かの会議があって、呼ばれて行ったこともある。警察の小説もいくつか書いた。彼らからたくさん材料をもらった。だからよく知っている人がいても当然だろう。

私は旧知の人に急な困りごとの助けを求めた。実際、別に道理に合わないというわけではないはずだ。警官の肖さんほか何人かは、その前年に我が家に来たことがある。問い合わせたところ、肖さんはお休みとのこと、ちょうどいい。彼に助けてもらおうとメールを打った。彼はすぐ引き受けてくれた。肖さんは輔警（警官の階級）であるが、私はずっと彼のことを肖警官と呼んでいる。警察系統には輔警の人はとても多い。私は礼儀として、彼らをみなそう呼んでいる。普通のことではないかしら。

その日は旧暦正月の 5 日だったと思う（本当に記憶がはっきりしない）。メールはまだ多分残っているはずだから、関係機関は調べたければ、チェックしたらいい。これを「特権を利用して」というのだろうか。そうなら、特権とは何なの？

今日の昼間は、ブログでこの問題を片づけるのにあてた。警察のお偉方が事情も分からず、本気で肖警官を処分するのではないかと心配だったから、特に説明したのだ。ブログの舞台は裁判所ではない。貴方たちが質問して、それに私は答えなければならないというわけではない。作家は警察に友人がいてもいいはずだ。その警官は勤務時間外に友人を助けても、それは人情の常ではないか。テレビドラマにもこんな話はよくあるはずだ。こんなことで大騒ぎするのは全くお笑いだ。

ついでに常識に欠ける人たち（告発者を含む）に私の状況を説明しておこう。毎回、何か言うたびに間違えることのないように。

1、私は今年 65 歳。すでに引退。病気もいろいろ。去年の春節前後はずっと病院で椎間板ヘルニアの治療を続け、年末によりや楽になった。私の病歴は私の所属単位と同僚が全部証明できる。去年の前半は歩く

のも大変だったから、家を出て、当番の仕事をするのもまったくできなかつた。それに年齢から言っても、当番の仕事をするのも無理。万一、転んで腰を打ったら、それこそ政府にご迷惑をかけることになる。

2、私は庁長級の幹部ではない！私は庁長級の幹部ではない！私は庁長級の幹部ではない！重要なことは3度言う。私は公務員でさえない。だから私には位階もない。だから口を開けば「庁長級幹部」と言ってくれる人たちを失望させることになる。退職後の私は普通の一市民である。当然、共産党員でもない。一貫して民衆の1人である。湖北省作家協会の主席になったが、体制を知っている人は分かっているが、私のような主席は実務を扱わない。省作家協会のあらゆる事務は党組織が決定する。しかし、いくつかの本職の活動については、私も協会のために世話を焼き、助けたつもりだ。

3、私の職称は「1992年正高」で資格「老」、多くの人と比べて、給料は高くもなく、とって低くもなく、生活には足りる。現在は社会保険の退職年金をもらっている。省作家協会は退職老作家の面倒をよく見てくれる。私の印象では徐遲（詩人 1914-1996）、碧野（作家 1916-2008）といった人たちあたりからこうなっていて、その伝統が現在に至っている。だから、引退後も作家協会はほかの人たちと同様に私の面倒も見てくれる。同業者もよくしてくれる。彼らの多くが成長するところを私は見てきた。会えばいつも和やかだ。私と一般の人とは確かに多少違う。私は今でも職業作家であり、100冊以上を出版している。多くの人たちが読んでくれて、とくに湖北人と武漢人は私を尊重してくれる。知名度のおかげで恩恵にあずかることも事実だ。レストランでは店長が料理を一品サービスしてくれたり、タクシーの運転手さんが降りるのを手伝ってくれたり、料金を受け取らなかつたこともあった。私はいつも感動する。

4、極左分子はずっと私のアラを探し続け、私のブログはおおむね彼らにめっちゃめっちゃにされる。そして何度も私を告発したと思う。しかし、私自身は告発されるようなことをした覚えはない。実のところ、私はこれまで人に告発されることは恐れなかつた。告発されないことのほうを恐れた。告発されないということは、人がデマを信じてしまう可能性があるからだ。いったん告発されれば、私に有利なことをすべて明らかにすることができる。正直なところ、規律検査委員会の人たちは私のような人間こそ規律検査委員会の仕事に向いていると感じているのではないか。廉潔で、規則を守り、恐れず事実に基づいて話をするのだから。

5、今日の私に対する攻撃は大変な勢いで、かつとても怪しげだった。突然、あんなに大勢が同じテーマ、同じ言葉で、同じポスターで、同時に私に攻撃を仕掛けてきた。あ、それから公開の告発も。皆で申し合わせていると感じる。昨夜、会議が開かれて時間を合わせて集団行動に出ると決めたようだ。

面白いではないか。誰が首謀者か？（自発的にこんな集団行動が起きるなどありえないことは馬鹿でも分かる！）。誰が火を点け、誰が煽って回ったのか、よく考えれば恐ろしいことだ。こういうオルガナイザーがある日、仲間を扇動して立ち上がり、破壊活動を始めれば、私の日記などより1万倍も危ないだろう。この組織とその仲間たちはこれほどの糾合力と行動力をもって、誰かを攻撃すると決めれば一斉に自分たちと考え方の違う個人に襲いかかる（聞くところでは、2人の教授が私を援護する話をしたそうだが、彼らのブログは朝までに炎上し、彼らは役所に告発されたそうだ。（この連中は言葉がちょっと食い違っただけで、号令一下、集団で個人を取り囲んで悪罵を浴びせる。テロ組織とどこが違うのか）。役所はあの連中こそ警戒すべきだと気が付きそうなものなのだ。彼らが役所を巻き込んだ回数も相当な数に上るだろうに。

6、ウイルス感染区に封じられた物書きが家にこもって感じたことを書いている。ほめる人はほめ、批判する人は批判する。自然なことだ。そう、じつは私はみんながなぜ私の日記を読もうとするのか分からなかつた。ところが2日前、1人の読者が、方々の日記は悶々としている自分たちの呼吸弁だと書いているのを見た。私の胸は形容のしようがないほど感動した。私が自分を励まして呼吸しているのが、ほかの人の呼吸も

助けているのだ。大勢の読者がいて、私を励ます文字をたくさん読ませてくれるので、私もこれを続けられる。こうした読者は私の封城生活における最大のぬくもりである。

7、しかし、私にはもっと分からないことがある。こんな過激でもない日記がなぜあれほど大勢に悪罵の包围攻撃を受けるのか。いつごろ始まったのか？誰が悪罵をけしかけたのか？どんな連中が多いのか？目的は何なのか？どんな価値観を持っているのか？さらに言えば、彼らの学歴、成長の背景は何なのか？仕事は何をしているのか？ネットには記憶があるから、誰か調べてくれれば真相がはっきりするかもしれない。研究に十分値する。私もすごく知りたい。

8、惜しむらくはあの大勢の若者たちだ。極左分子を人生の導き手とした時から、彼らは暗黒の深淵でもがき続けることになるのだ。

ウイルス感染のほうは引き続きいい方向だ。新しく確認された患者は2桁以下に下がった。多くの地区では0になった。この数字に皆喜んだ。今日は本来なら気分最悪の1日というところだが、病気についてはいいニュースだから、五分五分ということにしようか。(続)

訳者注：この日、日記の筆者はさんざんな目に遭っている。直接の原因は前日に引責辞職についての規定ががちり引用して、湖北省、武漢市の幹部に辞職を迫ったことにあるのは明白だが、まるで文化大革命の再来を思わせるような状況が再現されたらしいことに驚いた。と同時に、「中国では共産党の大方針に反対するより、幹部の個人名を挙げて批判するほうがはるかに危険なのだ。地位や出世に影響するようなことを言われた幹部は必死に発言者を追い詰めて、報復する」と、昔、中国人の友人から聞かされた警告を思い出した。

普通の市民はそうになったら、自分を守る手立てがないから、個人では言いたいことも言わないでいるわけで、作家、前湖北省作家協会主席の肩書を持つ筆者の日記が人気を呼んだのは、多くの市民の胸中を代弁しているからであろう。

それから今日の自己紹介の部分の3にある「私の職称は『1992 正高』』というのを説明しておく、中国の役所や団体の幹部職員には局長とか主任とかの「職務」と、専門技術の分野では「エンジニア（技師）」とか「農芸師」「教授」とかに与えられる「職称」の2種類の地位がある。筆者の「1992 正高」という職称は、数字の1992が私の推測ではこの年から作家協会に参加したことを示し、「正高」は職称の階級の最上級にあたる「高級の正」を示している。その下に「副高」（高級の副）、「中級」、「初級」（これにも「員級」と「助理」の2種がある）の4つの区分がある。次の「資格は『老』』というのはすでに退職して老齢年金の受給者であることを示していると思われる。

なんでこれを説明したかという、実はその前の2の「私のような主席は実務を扱わない。省作家協会のあらゆる事務は党組織が決定する」という部分に注目していただきたいからである。中国は中国共産党の独裁政権のもとにあることは知られているが、作家協会のような生産とか行政とかの分野でない、いわば「個人的才能の集まり」であっても、モノを決めるのは「党組織」なのだ。職称がいくら最高位であろうとも、実務上の決定権は党にあり、非党員の筆者は外向きの看板に過ぎなかったわけである。(200504)

「封城」（ロックダウン）下の武漢の暮らし

－ 方方女史の『武漢日記』（7）

田畑光永（ジャーナリスト）

3月13日

太陽は正午になってもまだ眩しい。午後になって光は薄くなり、風も吹き始める。お日様の顔は変わるときに変わる。このままでもう少し、と思ってもそれは無理。武漢大学の桜はもうみんな咲いたろう。老斎舎のベランダから下を見れば、白い雲のような一筋の花の帯だ。昔、学生の頃も桜は咲いたから、写真を撮りに行った。でもあの頃は見に来る人はいなくて、われわれ学生だけだった。観光スポットになったのはその後で、この季節にはキャンパス内は人で歩くのもままならなくなる。人の顔かたちは花卉と同じくらい多種多様で、人の群れの方が桜の花より見ものだ。

病気の蔓延具合は引き続きいい方向だ。退院する人が増え、新しく感染する人は数人だ。ところが今日は変だった。状況発表の時間がいつもよりおそかった。私は正午に行って、2、3のグループと言葉を交わしたが、みなその話をしていた。なぜ発表時間が遅れるのか。友人の医師たちは発表がちょっと遅れるとすぐさま人々に想像の空間を与えることになると言う。その空間には何が入るのだろう、私も考える。

封城されて50日が過ぎた。最初から封鎖50日と言われたら、その時はどんな気分になっただろうか。ともあれ私はこんなに長引くとはゆめ思わなかった。先月、病院へ薬をもらいに行った時、1ヶ月分で十分と思った。そんなに続くはずはないと。今となってみると、私がこの病気を甘く見ていたことは明らかだ。こいつの強さと持久力を過少評価していた。新しい病人は減り続けていても、へんな噂が絶え間なく聞こえてくる。すべてで手を緩めてはだめだ。いつ何時、反動が来るかわからない。だから、われわれは陣立てを崩さずに構えていなければならない、というのだ。しかし、われわれがここまで経験を積んだのはプラスで、感染しても恐れることなしに医師に診てもらえば、重症とならず回復も難しくないと。

3月も半分が過ぎようとしている。すぐに迫っているのが清明節（注：二十四節気の一つ。春分の後の15日目、4月の第1週。墓参の日）だ。肉親の霊を祭って香を焚き、墓を掃除する。これは長い伝統で、多くの家庭では毎年必ずおこなう決まり事だ。伝統的考え方をしっかり守る武漢人からすれば、今年は通らなければならない大きな難所が控えている。この2ヵ月余りの間、いっぺんに何千人もが死んだ。その死につながる人は何万人にも達する。肉親が旅立ったというのに、遺骨を抱くこともできない。とりわけ多くが死んだのは2月の上、中旬だった。初七日は混乱と悲しみの中に過ぎ、四十九日は清明節前後という人が非常に多い。非常時であることは理解していても、その時期が来たら、墓に行かずに故人を思い出し、悲しんですますなどということが出来るだろうか。そんなことは不可能だ。我に返って、これほどに長い抑圧に耐え切れず、精神の崩壊状況が出現するのではないか。じつは私自身、そのことを思うと、涙が抑えきれなくなる。

親しい人間を失った悲しみは、訴える相手がいて泣くことが出来て和らぐのだ。これは心を導く最善の方式だ。数日前、一つの文章を読んだ。多くのネット友達が李文亮（注：2月に亡くなった武漢市中心病院の医師。1回目に登場）のブログに書き込みをして、思いのたけを伝えていた。そこは嘆きの壁となっていた。たんに李文亮を記念するだけでなく、思いのすべてを吐き出したい友人たち自身の心が求めるものなのだ。病気の蔓延は今や最後の段階にあるとはいえ、清明節にはまだ日数がある。われわれはその間に「嘆きの壁」に匹敵する「嘆きのウェブサイトを」立ち上げることができる。

親しい人間を失ったら、その人の写真を掲げ、蠟燭を灯し、泣く場所を設ける。そこで泣く人は家族、友人に限らない。今は武漢の人間全部が思い切り泣く場所が必要だ。人々は「嘆きのウェブサイトを」を通じて、親しい人を泣き、友を泣き、そして自分自身を泣く。内心の悲しみを吐き出し、個人の思いを託す。勿論、心を慰める音楽を添えることが出来ればなおいい。泣いた後、叫んだ後、心は落ち着くだろう。病気がいつ終わるかはまだ分からない。すべてが未知数、未確定の今、無数の個人の悲しみ、気鬱を一つにまとめることは難しい。だから一つの空間を開いて、みんなで泣くことが必要だ。

このほか、まだ忘れてはいけない人たちがいる。初期の段階では大勢が感染したが、病院にはベッドがなく、治療どころか核酸検査の機会もなく、確定した診断など得られないままに、ある人たちは病院で、もっと多くは家で死んでいった。高校の同級生が言うには、彼の奥さんの同僚の家では2人が死んだ。お婆さんが家で息を引き取ってから、まる1日、葬儀社から迎えの車が来ず、夜になって箱型の貨物自動車に来て遺体を乗せて行った、という。似たような境遇の死者は少なくない。新型コロナウイルス肺炎という診断書がないから、この人たちは今度の病気による死者の名簿には載らない。それがどのくらいの数か、私には分からない。

今日、心理の専門家との電話でもこのことを話したのだが、もし居住区でこのような死者の数をきちんと調べて、新型肺炎の死者の名簿に加え、将来、国が遺族を慰問するような場合には、彼らのことも考慮すべきだと思う。同時に居住区がもう少し細かい仕事ができるのであれば、病状のために治療を受ける機会がなく、新型肺炎患者とはされずに死亡した人の数を割り出し、将来の慰問、全体的な配慮の中に加えるべきである。

ここ数日、病気の蔓延は落ち着いてきたが、街の悲鳴は相かわらず響きわたっている。最大の悲鳴はごみ収集車が住民への食糧配送にあたっていたからだ。私も昨日、現物を目にして茫然とした。いったい誰が思いついたことなのだ！ 恐れを知らない無知もここまでやるか。常識の基本もないのか、それとも庶民などは人間とっていないのか？ どれほど切迫した事情があったのかは知らない。しかし、どれほど切迫していようと、これほど目をそむけたくなることをしなければならないほどのことはないはずだ。

ある時期の政府が民生を第一に考えないで、もしもう一度、新しいX型ウイルスに見舞われたら、今年の災難がまた続くのだろう。役人たちが庶民を見ず、上司だけを見ていれば、ごみ収集車の食料運搬が再現される。「以人為本」(人を本とする)の観念がなく、庶民の角度から考えて、仕事をしないのが、現今の役人の大きな問題だ。官僚主義という言葉で形容するだけでは足りない。これはすべてが人品の問題というわけではなく、彼らの身体が1つの機械の中にあるからだ。この機械は快速で運転されるため彼らの目は上級にくぎ付けとなって、民草には向かないのだ。まさに言うところの「人在江湖、見不由己」(世の荒波で身動きならず)である。

閑話休題。今日見た「南方人物週刊」の一文について。衛生健康委員会の高級専門家メンバー、杜斌医師のインタビューで、タイトルは「このすべて、英雄主義とは無関係」。その中の一節に笑ってしまった。杜斌先生はこう言う、「病室の中にウイルスがいて、わんわんと目元にやってくる、などということは全く信じない」と。以前、別の専門家、王広発医師が「新型コロナウイルスが目に来て感染した」と話したのを覚えている。その時はこの一言で市場の防護眼鏡は瞬く間に売り切れた。友人の1人が私に防護眼鏡を送るので、私は自分で買うからと、その宝物を売る店の住所を聞いて、ネットで1個買った。その眼鏡は今日まで封も切らずにそのままだ。

そう、もう1件あった。今日、「方方封城日記」編集部、という名称で、ほかの人の文章が載っているのを見た。説明させてもらうが、この名称は私とはまったく関係ない。この名称の持ち主が別の名前に変えてくれるよう希望する、お互いが不愉快な思いをしないために。(続) (200505)